

障害を持つ子どもに対する学業マネジメント・スキル形成の支援

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
鈴木 史織

2007年度から、障害を持つ児童・生徒に対する学校教育は、特殊教育から特別支援教育へと転換した。特別支援教育の緊急かつ重要な課題の一つは、学習障害、注意欠陥多動性障害や、高機能自閉症などのいわゆる軽度障害の子どもたちへの対応である。これらの子どもたちの課題のひとつは学業・社会的行動をマネジメントすることができないことである。これらの子どもたちに、学業利益に対して戦略的に行動すること、つまり自らの学業行動をマネジメントすることを教えれば、通常の教育からもこれまでよりも利益を得ることができるようになるのではないだろうか。

先行研究では、セルフ・マネジメント介入が障害を持つ生徒の学業行動のマネジメントに良い影響を与えることを示している。したがって、軽度障害の子どもたちへの対応として、セルフ・マネジメント介入を行うことは有効だと考えられる。本研究では、軽度の障害を持つ児童生徒1名を対象に、コンピューターを用いた課題に対するセルフ・マネジメント・スキル形成の支援を行う。

3つのコンピュータープログラムを用意した。漢字読みプログラム、九九ランダムプログラム、九九空欄埋めプログラムである。参加児は、指導者がいない時に家庭で課題を行った。ベースライン、Phase I(自己記録)、Phase II(声かけ)、Phase III(目標設定)、Phase IV(リモートフィードバック)の5つの段階を行った。従属変数として、1日ごとの問題数、自己記録行動の生起と正確性、目標設定と達成についてデータを収集した。

結果から以下の4点が言える：(1)強化子だけでは、課題を行うことを維持することができず、先行刺激が必要だった、(2)自己記録とその正確性(言行一致)は強化されている、(3)毎日コンスタントに課題を行うには、毎日のフィードバックが必要、(4)ほとんどの課題と自己記録は漢字読みプログラムで行っており、課題間の般化は見られなかった。